

藝術第一人者

嶋 華 水 (談)

古靱太夫が、先頃愛嬢を失はれたその際の通知狀にもあつたさうだが、一時は茫然として全く途方に暮れ、いつそ出家してしまはうかとまで思はれたといふ。何しろこの令嬢を入れて都合八人の子女を悉く失はれたのだからまことに尤もな話だ。然し今の自分の位置を考へ、責任を痛感して、翻然として藝術精進に邁進しようと決意したのは實に悲壯だ。

私の舊友に竹井といふ老詩人があるが、この人も子を失つた悲しさを味つてゐる。而もこの人が古靱太夫と親交があるのも不思議な因縁だ。元來音曲に趣味を持つてゐるのだらうが、病氣保養の爲もあつて、殊に哥澤と義太夫には傾倒してゐる。特に義太夫は古靱の藝風に敬服して彼に私淑し、疑問の點が出て來ると、手紙を以て東京から一々聞き質すといふ熱心さだが、古靱太夫も亦その都度懇切な回答を寄こすので、竹井翁は益々感激してゐる。この人から此間古靱に贈る長詩一篇を私の許まで

送つて來た。その詩に就いては後に述べよう。

今年の五月、京大文學部の學生大會に古靱太夫に演奏を依頼すると、太夫は快諾して「菅原」の道明寺を語つた。而かもその折、謝禮を固く辭退された。文學部長の成瀬無極君は何かの形で謝禮したいと思つてゐると、偶々前の愛嬢の訃音に接したので、太夫を慰める意味をも加味して「藝術第一人者」と大書した額を贈り物とした。太夫は非常に感謝して喜んださうだが、それにつけてもなほ亡き愛嬢を忘れることは出来なかつた。

そこで成瀬君は大西利夫氏と相談して、古靱を慰める會を思ひ立ち、この九月六日、大佛の道樂といふ古い料亭にその慰藉の會を開いた。藤井紫影、太宰施門、山本修二、堂本寒星、長崎主事の諸君が出席された。開會の挨拶について古靱太夫はその通知狀にもあつたやうに、愛嬢の死は忘れんとして忘れ能はざるところだが、藝道の爲にはそれを敢て忍んで、層一層藝道精進を誓つた。

そしてその席上愛嬢の死に就いては一切語ることをお互に避けることにした。古靱は問はれるまゝに、樂屋内の作法や修行に就いて語つた。酒につれて話にも愈々興が乗つて、三時を過ぎて散會する程だつた。

この席上で、來會者一同が葉書に署名して、前に言つた東京の竹井翁の許へ送つたところが、折返して翁から件の詩篇を寄せて來た。それには引(序文)が附いてゐるが、それをも併せて「淨瑠璃雜誌」の誌上に發表することは、正に處を得たものだと思ふ。詩篇と引は次の通りである。(引は自分が和譯した)。

—以上文實、三木八十八—

引

今夏七月、古靱太夫東都出演の事あり。事畢つて始めて愛嬢の計を聞く。慟哭絶えんと欲す。哀悶輾轉の餘奮然として思へらく、吾苟くも古藝道の重きを荷ふ、其の盛衰の分かるゝ所、責たる極めて大なり、情苦の爲に中心を亂すべからず、是に於て意を決して古曲を宣揚す。蓋し此の如きは誠に大丈夫の行爲なり。然りと雖も人もと有情、終天の悲何れの時か忘るゝを得ん會ま九月の月上旬、文樂座引越興行を、京都南座に演ず茲に予と感を同する者七氏あり、太夫を古都の一亭に招き、雅筵を張り、以て其の懷を慰籍す。眞に風流

逸事を成すと謂ふべきなり。坐間一書を裁し、各名を署して、遠く我に寄せて其事を報す。毫髪一たび見て悲喜交々至り、感激に堪へず。即ち其事を記して、韻語一章となし、古靱太夫に贈り、併せて七先生の一綵を博す。詩韵は老杜の八仙歌に依り、末に更に杜句を借りて結べり。

寄豊竹古靱太夫

竹井星溪

古曲妙趣誰得傳。有_レ人研鑽經_二幾年。果然見_レ推_二紋下位_一。一燈高照光燦然。有_レ女慧淑妍如_レ玉。斯子有_レ病何因緣。父如_二勇士臨_二實戰_一。女似_二花片隨_二逝川_一。菊榭桂折父未_レ識。忽焉淨土生_二金蓮_一。聞_レ之慟哭淚亦盡。痛恨難_レ遣呼_二蒼天_一。蒼天不_レ答終自奮。誓爲_二斯道_一加_二一鞭_一。君志如_レ此眞悲壯。一聞_二是事_一流涕漣。我亦曾嘗_二別離苦_一。嘆君處_レ此能得_レ全。欲_レ慰_二君情_一獎_二君志_一。恰好京洛鳩_二七賢_一。古都風光秋既近。山紫水明開_二嘉筵_一。名流才子博士等。併_レ君畢竟成_二八仙_一。我輩山河隔_二百里_一。辱報_二佳會_一飛_二一箋_一。三十六峰空馳_二思_一。不_レ得_二坐上俱周旋_一。眼中之人吾老矣。獨誦_二杜句_一徒自憐。

壬午秋九月

白巖星溪叟